

LIFEV - 言語の違いを越えて世界を学ぶ
留学生と交流しよう

< 配当時間数 4 ~ 5 時間 >

異なる文化背景を持つ留学生を招き、
交流活動を通じて、異文化について理解や
関心を深める。

キーワード：異文化理解 国際交流
コミュニケーション

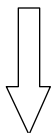


1. 単元の目標

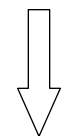
異なる文化背景を持つゲストスピーカーをクラスに招き、交流活動を行う。その体験を基にゲストの文化背景 (Target Culture : 以下TC) に関連させて、探求活動のための課題の設定を行い、文化理解を深める。

2. 単元の構成と特色

1st Step : ガイダンス

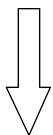


ゲストの背景文化 (TC) と日本の関係を生徒がどう理解しているか、生徒がTCへどのような興味関心を持っているか把握・分析する。



2nd Step : 交流活動 (図1)

留学生や地域の人で文化背景の異なる人で、英語を話せる人を招く。
この段階での直接体験の感動が、その後の活動を支えてくれる。



3rd Step : 経験の深化 (図2)

ゲストの話からわかったことや自分の興味を持ったことを基に、グループで一緒に調べること・考えていくことを、しっかり考えさせたい。



(図1 : 交流活動の様子)



(図2 : グループ活動の様子)

第4章 LIFEの事例

3. 主題に迫るための手だて

異なる文化・価値観に出会ったとき、次のような反応が考えられる。(1)新しいものを無批判に肯定し、受け入れる。(2)異質なものは理解できないと考え、拒否する。(3)異なる背景を理解しようとし、尊重する。(4)今までにない、まったく新しい価値観を持つ。

限られた時間のカリキュラムではあるが、(3)のように、異なる価値観が共存できる道を探る、という態度を大切に交流活動を展開すべきである。自分たちの文化や生活とTCを関連づけることは、有効な手段の一つであろう。

4. 単元における評価の観点・方法

生徒の異文化理解を把握することを目的として、以下の観点を含めたアンケート調査を実施する。交流前調査は、ゲストが講演の内容を決定する手助けとするために、交流後の調査は、グループ分けのために生徒の実態を把握する手段として利用する。

(1) 異文化への関心 (交流前調査)

生徒の文化理解は、事物への興味が中心か、思想・行動への興味もあるか
留学生の講演について、どのような期待を持っているか

(2) 探求活動への意欲・態度 (交流後調査)

グループの構成員の興味・関心のある内容が、グループ毎に選んだテーマをもとに一貫性をもって絞り込まれているか
自分たちとTCの関わりを意識しているか
調査の方法や計画には見当をつけているか

5. 教科等との関係

教室以外で、英語を用いてコミュニケーションを図った経験を持たない生徒にとって、英語で質問するのは大変プレッシャーのかかることである。質問内容をグループで相談させる時間を設けたり、ゲストにグループを回ってもらう等、生徒の実態に応じた工夫が要る。

英語が通じたか通じなかったかということも、生徒には大きな問題であろうと思われる。しかし、LIFE Vでは、異文化理解につながるように交流の内容を振り返らせたい。

第4章 LIFEの事例

7. 指導のポイント

< 1. ゲストとの打ち合わせ >

ゲストスピーカーのすべてがプレゼンテーションに慣れているわけではない。以下の工夫が必要であろう。相談事は電子メール等を用いればお互いを拘束せずにすむものである。日程的な余裕を持って始められれば、それほど困らない。

生徒に対する事前指導からのフィードバック (図3)

生徒がTCに対して持っている興味や知識を教師が把握し、その情報をゲストが訪問する前に知らせておく。生徒に自由記述式のアンケートで書かせたことを、項目別にエクセル等の表計算ソフトで一覧にしておくと、あとで集約がしやすい。

ビジュアルエイドの活用 (図6)

ずっとスピーチを聞いているのは大変なことである。葉書や写真を準備してもらうこともこちらからお願いするとよい。学校が準備できる教具や機械の類を、相手に事前に伝えることも忘れないようにしたい。

直接的な異文化体験 (図7)

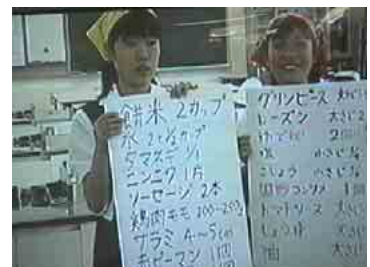
調理実習などを通じて、食文化の紹介するのも、生徒が (図6: 写真を用いた発表)

リラックスできてよいであろう。食中毒の防止等、注意を払わねばならない。



< 2. 文化理解に必要な観点 >

「文化とは何か」、指導者が頭に描いておくべきであろう。ただし、まとめ方は多種多様である。しかも生徒の表現は実に多様である。こちらの予想を越えるものもある。素早く対応するためにも、観点はしっかりしておきたいもので (図7: 調理実習を取り入れた活動の様子) ある。



「文化」全体を個人の考えや経験から考える

一人の留学生の意見は、あくまでその人の意見である。その国の人すべてが同じ意見であるはずはない。しかしそれを聞く生徒が先入観を持っていないとは言えない。スピーチの内容は、事実なのか、個人の意見なのか。他にも、地域性や世代の差も考慮しなければならない。指導の過程で生徒に注意を喚起しないと、ステレオタイプの形成につながりかねない。

第4章 LIFEの事例

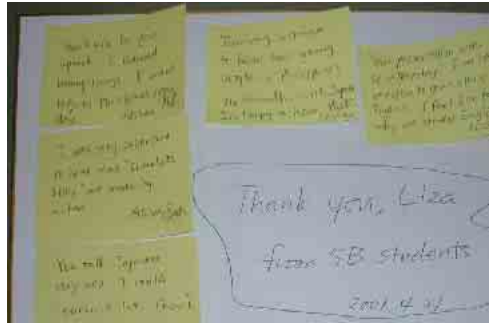
「文化」を整理する

文化を理解したと言うために、わかっておくべきことは何であろうか。当校の実践では、ゲストスピーカー^{*}の講演を引用して、「言語・歴史・慣習・宗教・ユーモア」という観点を示した。限られた時間であるから、「文化を理解した」と感じることは難しい。しかし、観点をはっきりしておかなければ、なんでも文化だと安易な結論に陥ってしまいがちである。

*) 広島大学総合科学部教授 Goldsbury 先生の 2001.8.30.の講演会での発言による。

< 3 . 交流の最後にちょっとした工夫を > (図 8)

クラスに一人のゲストを招いたとすると、全員がお礼の言葉を直接伝えるのは難しい。そこで付箋紙に一人ずつ言葉を書かせて、色紙に貼り付けて相手に渡すと、感謝の気持ちが形になる。この方法であると作成にもそれほど時間がかかるとはならない。



(図 8 : 色紙の見本)

< 4 . 交流経験をどのように深化させるか >

交流後の調査結果を基に、クラスの中で同じ興味を持った生徒を結びつけ、さらに表現活動に向けて「準備」を始める(図5)。しかし単なる準備ではない。この活動を通じて、現時点でのTCに対する理解が明らかになる。

プレゼンテーションで使用する言語は、プログラムの趣旨から考えて英語であることが前提であるが、各校の実態に応じて英語か日本語かを選ぶとすれば、この単元である。

< 5 . ゲストを学校に招くための方法 >

一度ゲストを招いただけでは、Target Culture についての全体像が描けないのは無理もない。解決策ではないが、次善策として、JICA(国際協力事業団)に要請して、海外青年協力隊としてTCの地域に派遣された人を講師として招くことはどうであろうか。学校の授業のために招待する場合は、「JICA サーモンキャンペーン」が便利である。交通費・謝金はJICAが負担してくれる。 * 詳細は <http://www.jica.go.jp/>

学校に来てもらえるゲストを探すのも何かと苦労する。例えば、地域の国際交流協会の交流会に参加すると、その団体の主催する交流会の運営の仕方から参考になることも多い。また、学習会に出席して、個人的なコネクションを作るのもよい。